山梨新報「直言」原稿

二〇〇七年七月二十日

「13万番目以下」に光を

山梨大学名誉教授・前山梨大学副学長　伊藤　洋

たった数万か数十万の人間が広大な大陸に放たれて、「さあ、お前達の能力の限りを尽くしてここで生きて行け」と言われたら、人間はどのように振舞うのであろうか。あまりのスケールの大きさに考え込んでしまうとしても、やがて勇気を鼓舞して大陸深く入り込んでいくことだろう。

ある者は水辺の肥沃な土地に鋤を入れて農業を始める。またある者は銃に弾を込めて狩猟や漁労に没頭するかもしれない。これらの人々のために家を作る建築家、衣食を販売する商人、炭や石炭・鯨油などのエネルギー産業や、馬車や鉄道など輸送を創業する人、子供達のための公教育を志す者、医療や保健や宗教的癒しに努める人。人々は自らが持つ才覚を誰にも阻害されずに発展させて生きていくことになるだろう。ここでのキャッチフレーズは「能力主義」であり、「市場原理主義」である。

やるべき仕事や資源が無尽蔵に与えられ、同じ仕事をする者が他に無く、一人ひとりが作り出すすべてのものが他者によって競われることが無い以上「市場」は事実上独占であり、何もかもが意味のあるものとして位置付けられているからである。

こんな理想的な？世界があったのかというと、あったのである。17世紀中葉の北米大陸である。そこには少数の原住民がいたがそれには目もくれず、尊大にも広大な大陸のすべてが少数の植民者たちの独占物と認識されていた。とはいえ、大陸を西へ西へと進んでいくとやがて先行していたスペイン人などとしばしば小競り合いが始まる。するとこれと戦端を開き、彼らを追い出して「能力主義」と「市場原理主義」を貫徹していったのである。

彼らのこうした行動を支持したのが近代経済学の祖アダム＝スミスである。彼は、1776年、時あたかもアメリカが祖国イギリスから独立を果たしたその年に「国富論」を書いて、「神の見えざる手」による「市場主義」

と分業による「能力主義」を理論付けたのである。

話し変わってこちら「美しい国」日本。小泉政権が推し進めた「改革なくして成長なし」のキャッチフレーズはまさにこの旧きよき時代のアメリカ人の美学を論理化した「新古典主義（ネオコン）」であった。そこでは能力主義が原理であったから、必然的に「オンリーワン」だけが市場を席巻できることとなった。結果は言わずと知れた「格差」の発生である。いわく「能力格差」、「所得格差」、「地域間格差」、「企業間格差」、「業種間格差」と、ありとあらゆる格差が生み出されてきた。なぜか？

そもそも、この農業国日本には、建国時代の北米大陸のような豊富な資源と機会が提供されていたことなど歴史の中に一度も無かったし、ましてや小泉政権発足時に有るわけもない。すでに耕して天に至るほどに、社会的システムの何もかもが整理されていて、人の手の届いていない部分など皆無である。かてて加えて、いささか独創性に乏しく、無から有を作り出す創造力も小さければ機会そのものも少ない。そこへ「オンリーワン」を強制すれば文字通り「ただ一人」を除いて全員が敗者とならざるをえないのである。かくして「改革」には、新種の貧困を創造するところとなった。

近頃、「ロングテール」現象という言葉が流行している。書籍ネットの販売の草分けアメリカのアマゾンの売り上げを調べてみると、売り上げ順位1３万番目以下の不人気の本が、なんと売り上げの三分の一に達するという。このように、街の本屋では売り場面積の制限のために、公営の図書館などでは書架が無いことを理由に所蔵されない本にも陽の目立たないようにされてきたように、これを恐竜の長い尻尾になぞらえてロングテール現象というのである。元来、書籍の流通はベストセラーばかりが喧伝され、それゆえマスメディアをはじめ人口に膾炙してまるそれらばかりが良く売れる。文字通りオンリーワンの世界だったのである。

ロングテール現象は、世界の潮目の変化と捉えてよいのではないか。そうであれば、われわれの身の回りにある１３万番目以下の諸々にも存在の意味や意義が出てきたと言えるのである。

いま、参議院議員選挙真っ只中。政治家諸君に告げたい。「市場原理主義」だ、「オンリーワン」だと言って、「１３万番目」以下を無視する格差政治はもう止めよと。